

【研究ノート】

## 満洲国における北村謙次郎の創作

——「春聯」を中心に——

韓 玲 玲

はじめに

北村謙次郎（一九〇四～一九八二年）は、東京に生まれ、幼少期は関東州の大連で過ごした。一九二三年、進学のため日本に戻り、十数年ほど東京で近代文化の諸相を受容しつつ、昭和初頭、日本文壇にデビューした。『作品』、『青い花』、『日本浪漫派』などさまざまな雑誌に寄稿し、赤松月船、木山捷平、太宰治などの詩人や作家たちとの交流を通して、自らの文学の方向を模索し続けた。一九三七年、北村は満洲国の首都新京に移住し、満映（満洲映画協会）に勤めたが、のちに同社を辞し、文学活動に専念することになった。『満洲行政』、『新天地』、『満蒙』、『協和』、『観光東亜』など、多方面の雑誌に旺盛に執筆する一方、木崎龍、吉

野治夫、緑川貢、長谷川瀆など満洲に住む日本人作家を糾合して、文芸綜合雑誌『満洲浪漫』を創刊し、また「鶴」、「砧」、「或る環境」、「春聯」など、数多くの文学作品を残した。戦後、北村謙次郎は回想録『北辺慕情記』<sup>1</sup>を著わした。同書は、満洲国における日本文学・文化運動の実態を知る上での、貴重な証言となっている。

本稿では、北村謙次郎が満洲で創作した唯一の長篇小説「春聯」を取り上げる。この小説は、北村にとって初めての長篇でありながら、川端康成によって「建国十年間の満洲文学のおそらく最高の収穫だ」と認められ、『作文』同人の吉野治夫からは「どことなく満洲らしい色と香をにじませてゐる」<sup>2</sup>と評された。北村の作家歴においても、この小説は、もっとも読者に読まれている作品だと見てよい。本稿では、その成立の経緯を辿りながら、北

村謙次郎の在満期の創作上の特質と、彼の満洲国との関わりについて論じていくことにしたい。

## 一 「春聯」の誕生

### 1 出版の経緯

春聯とは、中国の旧正月に、新たな一年を迎えるため、家の正門の両側に貼る縁起のよい対句のことである。通常は赤い紙に黒字で書かれている。十世紀頃、中国宋朝初期の蜀王孟昶<sup>④</sup>によって書かれた「新年納余慶、嘉節号長春」という詩句まで遡れば、春聯は千年以上の歴史を持っている。その対句も、当初の魔よけから、祭礼を祝ったり、よりよい生活の到来を祈ったりするものまで、意味が広がっている。

この「春聯」という言葉を小説のタイトルとした事情について、北村は新聞に小説を連載するにあたって、「春聯の名を小説の題に借りたのは別に他意ない。要するに僕は春らしいゆつたりした小説を書きたいと、いつも考へてゐるとほりのことを、春聯の名に託したまでである<sup>⑤</sup>」と述べているが、そこには、間近に迎えた「満洲建国十周年」（一九四二年三月）に対する祝意もいらかは込められていたと思われる。

小説「春聯」は、一九四一年一月二十一日から五月二十四日ま

で全九十五回にわたって『満洲日日新聞』夕刊の第一面に掲載された。同紙夕刊第一面に小説が連載されたのは、長谷川濬の翻訳した満洲在住の白系ロシア人作家バイコフの「虎」<sup>⑥</sup>が最初であり、次いで榎本捨三の「成吉思汗」<sup>⑦</sup>、「春聯」は三番目となる。バイコフの「虎」は、のちに単行本として刊行された。日本でも「偉大なる王」と改題されて出版されたが、両者とも読書界の好評を呼び、相当の売れ行きを見せた。この前例もあって、北村謙次郎の「春聯」も、連載開始時より読者から注目されていたと思われる。連載一回分は約一二〇〇字。満洲の荒々しい自然と登場人物をスケッチした挿絵と合わせて、同紙一面を飾るにふさわしい作品だったといえよう。

連載にあたって『満洲日日新聞』は以下のように紹介している。

北村謙次郎君は一人敢然文筆一途に進んでゐる人、その流麗な筆と落ち着いた作家態度は既に知らるゝ処、名作「鶴」<sup>⑧</sup>、或る環境」に次いで、「春聯」に於いて揺がぬ北村文学を打ちたてようと言ふ。挿絵の白崎海紀君は第二回展<sup>⑨</sup>の民生部大臣賞を獲得、古典美の中に新感覚とロマン精神を打ち樹てようとする気鋭の青年画家、その繊細な筆と新鮮な構図とは北村文学を最もよく生かすもの、作品と離れて見ても新聞挿絵の新生面を開拓するものといへよう<sup>⑩</sup>。

一九四一年、北村謙次郎は、すでに満映の仕事を辞め、文筆活動に専念していた。その作品も一九三八年の「鶴」、「群盲」、一九三九年の「或る環境」などが『満洲浪漫』や『満洲行政』に発表され、満洲唯一の専業作家として在満日本人の読書界にもよく知られていた。その文名は、挿絵担当の白崎も十分に承知していたようで、「貧少な技を悲しみつゝ、そのくせ日本の古典にある絵巻物、物語扇面図絵、ファウストへのドラクロアの挿絵等をうつろな眼で憧れおのゝいて居ります。思ひを転じてみても北村謙次郎氏の魂の静座を考へるとき避け難い不安に襲はれます」と、北村文学への信頼を込めつつ、自身の仕事に対する覚悟と抱負を述べている。

なお、小説の内容について、『満洲日日新聞』は次のように書いている。

「春聯」は旧正中国人家屋に飾られる吉祥の札紙であるが、この小説に扱はれる問題は白系露人はどうなるかの問題である、満洲国建国当初の蘇炳文事件、美しいエミグランツの唾娘ソフィア<sup>11</sup>、うらぶれた寛城子部落の露人生活、そして建国の逞ましい槌の音に伴つて彼らが進む楽土の序章……今日世界に嘗て見ざる民族協和の楽土建設に参加する我々の等しく考ふべき露人問題がいかに提出され、如何に方向を与へられ

るか期して愛読を乞ふところである。<sup>12</sup>

おそらく、この紹介文は、『満洲日日新聞』の編集担当者が作者北村謙次郎と相談した上で書いたものであるが、しかし、ここで「春聯」の主要テーマが白系ロシア人問題であると指摘されているのは興味深い。「春聯」と「白系ロシア人」、一見関係のない両者を、北村謙次郎はいかに関連付けたのか、白系ロシア人問題をテーマにした目的は何なのか、そういった問題も、以下の論述で解明することにした。

『満洲日日新聞』は一九〇五年に大連で創刊された新聞である。「東亜大陸に於ける最大有力紙として」<sup>13</sup>、一九三八年以降、この新聞の社は本連から奉天に進出し、その販売地域も全満ならびに華北・華中方面まで伸びていった。このような大陸の代表的新聞から長篇の連載を依頼されたことは、筆一本の作家生活を志す北村にとつては都合のいい話であつたはずだ。金銭的な面においては言うまでもなく、多数の読者が想定されるということだけでも作家としての意欲を十分にそそられたに違いない。しかし、そのこと自体、満洲国支配の一端を担うメディアの装置に自身が組み込まれることをも意味した。北村が一九三七年、満洲国に渡った時点から、彼の数々の文学作品と一連の文学活動はすでに、彼の自由を求める精神の、国策に対する抗いと妥協とを物語っていた

のだが、今ここでは、その点については詳しく触れないことにする。

一九四二年三月十二日、「春聯」は川端康成の斡旋で日本の新潮社から単行本として刊行された。その背景には、一九四二年四月、川端康成の初めての満洲旅行があった。当時、『満洲日日新聞』と満洲棋院が「全満素人囲碁選手権大会」を催した。呉清源<sup>14</sup>をはじめ、川端康成や村松梢風などが『満洲日日新聞』によって、この催しに招待された。その後、川端は、二十日かけて満洲の日本文化人と座談会を行ったり、囲碁を観戦したりして、満洲各地を旅した<sup>15</sup>。その折、川端が旧知の北村謙次郎を寛城子（新京の郊外）に訪ねたが、彼の生活ぶりに興味を覚え、また、『満洲日日新聞』に連載中の「春聯」に注目したのがきっかけであった。

一九四二年のころまで、日本国内で書かれた「満洲もの」は、旅行者などいわば第三者の視点からのものが多く、在満日本人の手になる、満洲という土地に根付いた文学作品は、ほとんど紹介されていなかった。<sup>16</sup>

単行本『春聯』はB6版の、一見、清楚な感じの本である。装丁の水谷清は、ピンクの「チャイナドレス」を着た中国人の少女を表紙に描き、扉には、中国人婦人が子供を乗せた台車を引く様子を描いてみせた。しかし、北村のこの小説には、中国人女性などまったく登場しない。初出の『満洲日日新聞』に連載されたと

きには、白楊が並ぶ街路とか、白系ロシア人の姿といった満洲情緒の溢れる白崎海紀の挿絵が添えられていたが、単行本では、小説の内容とは無関係の絵が使われているため、読者に相当の違和感をもたらす。水谷清が作品を読まないで装丁をしたとも判断されるが、あるいは、版元の新潮社の、読者多数のエキゾチズム（中国一般に対する通俗的イメージ）を当てにしているの企みだったのかもしれない。

作品内容の面では、初出（新聞）と単行本との間にそれほどほどの差異は見られない。新聞小説の特徴<sup>17</sup>と見なされるものは、単行本では（挿絵がなくなったこともあって）稀薄になっているが、語句の推敲<sup>18</sup>や改行の増減などの工夫もあって、文章全体は洗練され、読みやすくなっている。

ただし、初出にしても単行本にしても、「春聯」は静かに流れる川のように落ち着いた文体で書かれていて、その叙情的な基調といった北村謙次郎の本来の傾向は変わっていない。逆に言うと、そのストーリー展開にはプロットの転換・起伏といった波乱に乏しく、読者一般の興味を、どれほど惹きつけることができたかは疑わしい。しかし、作者は「ゆつたりした」<sup>19</sup>構えを全篇につらぬき通し、そこに彼の「自信」と「わがまま」を見ることもできそうだ。

一九四二年五月二日から五月二十六日にかけて、「春聯」は、

「ハイラルの曙」というタイトルで東京宝塚劇場（東宝）で劇化・公演された。「満洲国建国十周年慶祝」と表紙に刷られた「第三回東宝国民劇公演」のパンフレットによると、脚本は水木久美雄の手になるもので、原作「春聯」の第一、二、九章を省く、四場で構成されている。つまり、新京における副主人公の物語は取り除かれ、ハイラルを舞台にした「蘇炳文事件」だけがドラマ化されたのである。演出は出島耕二。配役は小野浩太郎役に中田弘二（大映）、ナターシャ役に芝恵津子（東映）などである。同パンフレットには、同時に公演された日本民族舞踊「薩摩組曲」（全一場）と歌劇「蘭花扇」（二十場）の紹介記事も出ている。特に「蘭花扇」（白井鐵造作・演出）は、満映スターの李香蘭が主役の孟姜女を演じたことで注目される。

戦後、「満洲文学」に対する再評価がしばしば試みられ、その動きは今日、ますます高まってきている。そうしたなか、関連作品のアンソロジーも何度か編まれてきた。たとえば牛島春子の「祝といふ男」や日向伸夫「第八号転轍器」は、一九六四年に『昭和戦争文学全集』<sup>(20)</sup>に、一九九六年に『外地』の日本語文学選<sup>(21)</sup>に収録され、前者はまた、二〇〇一年に復刻された『日満露在満作家短篇選集』<sup>(22)</sup>でも読むことができるようになった。最近、集英社から出た『コレクション 戦争と文学』の第十六巻「満洲の光と影」には、竹内正一の「流離」、牛島春子の「福寿草」な

どが収録されている。それらに比べ、北村の場合、「春聯」が『昭和戦争文学全集』に収録されただけに留まる。しかも、そこでの「春聯」は、作品構成上、きわめて重要な第二章と第三章をはじめ、第七、八章などの数章が削除されたり要約されたりして、元の作品の数分の一の量に縮められているため、一篇としての全体像が見えなくなってしまう。その意味では、戦後の北村は不遇な扱いを受けているといえるだろう。

前述したように、「春聯」は『満洲日日新聞』の要請に応じて創作され、発表されたが、その後、川端康成の紹介によって日本で出版され、さらに東宝で劇化された。この一連の華々しい動きは、満洲文学の作品としては異例のことであった。当時の北村は作家としてきわめて恵まれていた。しかし、その幸運は、日本の中国東北支配という時代状況に包まれたものでもあった。北村が、その時代の動きに半ば迎合しながら、この作品を書いたことは疑いようもない。

## 2 内容の紹介

「春聯」は一九四〇年代の満洲国を舞台に描かれた物語である。新京の北郊・寛城子に暮らす銀作兄弟の先行きの見えない世界に、満洲国建国の「ヒーロー」小野浩太郎が突然現れ、彼の語る建国回想談によって新しい息吹が二人にもたらされるという筋書で、

全九章から成っている。冒頭の第一章「秋深し」、第二章「知られざる風貌」と第九章「霧氷」では、「現在」の時点、すなわちこの小説が書かれた一九四一年当時の新京が舞台となっている。その間の六章分、第三章「白虹」から以下、「若い翼」、「ながれ」、「風蕭々」、「地下暦日」と第八章「大火西へ」までは、満洲国が作られた一九三二年当時の呼倫貝爾（ホロンバイル）、その中心地の海拉爾（ハイラル）を舞台とする「蘇炳文事件」を中心に展開されている。つまり、一篇は、「現在」という時間枠に挟まれた形で、「過去」の建国初期の物語が回想されるという構造をとっている。

第一章「秋深し」では、満洲の白楊が枯葉を散らすようになった季節のもと、振作兄弟の日常が描かれる。兄振作は三年前、妻を日本に置いたまま満洲にやってきて、今はM撮影所（「満映」のことであろう）に勤務しながら、のんびりと無為の日々を過ごしている。彼は周りの中国人、白系ロシア人の生活ぶりを観察しながら、在満日本人の消極的な生活態度を冷眼視して不満を持っているが、自分の生活を変えようとする意欲はなく、なんにでも「ゆつくりした」態度をとっている。一方、弟貞造は半年前、東京の役所仕事を辞め、満洲に職を求めてやってきたばかりだ。彼は満洲国に夢と情熱を抱いているが、一体どのような「夢」であるのか、自分にもはっきりわかっていないし、その「情熱」をど

のような「行動」に変えたらいいのかもわかっていない。半年間、兄振作に頼って暮らしていたが、兄ののんびりした調子についていけず、仕事探しにも苛立ちを覚えている。二人は、貞造の働き口をめぐって、周囲を冷眼視する兄と気が焦る弟という両端において意見が分かれている。異民族の雑居する寛城子に住む二人は、日本人の頻繁な引越し風景、中国人のたくましい暮らしぶり、ロシア人の不安定な生活ぶりなどを見聞きしながら、日々を送っている。

そんな折、兄弟の隣家に小野浩太郎という男が引越してきた。小野は満洲国が成立した頃からずっと建国運動に関わってきた。ロシア人の手伝いを使ったり、三河地方に出張したりしているこの男の謎めいた行動と風貌は、兄弟の興味を引きつけた。ある夜、兄弟は建国当初の小野の体験秘話を語ってもらうことになった。

一九三二年五月、小野浩太郎は「蘇炳文反乱」を抑止するため、国境警察隊の分遣隊長としてハイラルに派遣された。赴任直後、彼はすぐ密偵に会って情報を収集したり、事件発生に備えての対策を立てたりして、敏腕を振るった。その後、分遣隊舎の貸借をめぐって、ユダヤ人ウンケルマンが登場する。彼は毛皮商売に従事して贅沢な暮らしを送る、物欲旺盛な人物である。日本の国境警察隊に隊舎を提供していることで中国護路軍から警告を受け、

彼は隊舎移転問題を解決しようと小野に相談したが、きつぱり断られたあげく、彼の金銭を狙った蘇炳文の副官趙局長によって暗殺される。この事件は、蘇とは直接の関係がないが、事態の緊張はここに端を発する。ウンケルマンの死後、彼のもとで生活していたロシア人少女ナターシャが家を出て、ハイラル河畔で小野に発見され、牧場経営者ピョートル宅に送られる。満洲国の建国工作が進められていくなか、ハイラルでは北満最初の飛行機が到来することになった。飛行場の設営によって、緊迫した空気が一層みなぎってくる。飛行場建設は蘇炳文軍の妨害を招いたが、どうにか無事に完成することができた。しかし、蘇の抗日的挑発も徐々に激しくなっていく。満洲国の民生部警務司洪科長の暗殺事件、日本外務省留学生在が北満の列車で銃殺されるという事件などが、次々と起きる。それらの事件に対して、小野は蘇炳文の司令部を訪れたが、彼と面会できず、事件はうやむやのままに終わる。だが、小野の分遣隊と蘇軍との衝突は真近に迫っていた。九月二十七日、満洲国の商業航空による初めての北満訪問の日、ついに大きな衝突が生じた。ハイラル在住の日本人二五三名は蘇軍によって監禁され、飛行機を迎える小野たちも攻撃を受け、部下の多数を失った。小野は負傷して中沢警士と二人で脱出し、長い逃亡生活に入ることになる。

ハイラル河の孤島での潜伏、中国人漁夫との交渉、砂穴の一夜

……小野と中沢警士は、かろうじて蘇軍の追及をかわすことができた。死と向かいあつた困苦のさなか、小野は満洲の「土」を掌に載せて、幸せそうに満洲国の「夢」を語り、「僕らは決して、無駄に死ぬわけぢやないんだよ」と中沢と誓いあう。転々とした不安な日々のある夜、二人は、夢遊症のナターシャがうたう歌に導かれて、ピョートル邸に辿り着き、そこに身を隠すことになった。ピョートル夫妻は、親日的な白系ロシア人で、心を尽くして小野たちの面倒を見る。小野は初めて異民族の白系ロシア人を信頼し、彼らの生活を観察するようになった。ピョートル夫妻の穏やかな夫妻関係、ナターシャと、その夫グレゴリーのそれぞれの個性、日本人の支配する満洲国への信頼と、日々の勤勉、すべてが小野の目に好ましく映つた。彼は白系ロシア人の「簡素」な生活態度に心打たれ、それこそ満洲のこれからの生活文明だと賛美し、在満日本人も白系ロシア人のように満洲の風土に従つて定住すべきだと結論付ける。

蘇炳文事件後、小野はナターシャの希望を受け入れ、彼ら夫妻を連れて新京に帰ることになったが、二人が都市生活に慣れないため、夫のグレゴリーの病死後、ナターシャ一人、ハイラルのピョートル牧場に戻すことにした。彼女を見送つた小野は、白系ロシア人は北満で農業に従事するのが一番幸福だという確信を抱き、三河地方の白系ロシア人の移民事業に専念することになった。

この小野の話聞いて、振作兄弟はいまさらのように、建国運動に関わった人達の労苦がしのばれ、大いに感銘した。やがて、弟は小野の紹介で白系ロシア人の移民事業の仕事に就き、辺境へと旅立ち、建国運動の一端に加わることになったが、兄は寛城子で相変わらず「妻を満洲に迎えるかどうか」を悩み続ける。

## 二 「春聯」における白系ロシア人問題

一九三〇年代半ば以降、日本の「百万戸移民計画」が徐々に本格化し、満洲に移民してくる日本人の数が増加したが、それに伴い、満洲に適応できない彼らの実態も問題となってきた。寒冷地に慣れない日本人移民に現地に適応した生活モデルを提示するため、日本・満洲国の両政府は、「満蒙開拓」政策を推進する研究所や調査機関を通して、中国東北のさまざまな民族の農業経営や生活状況を調査すべく動き出した。白系ロシア人村もこのとき、満洲国政府の視野に入るようになった。<sup>28)</sup> たとえば、一九四一年の『ロマノフカ村の話』（山添三郎、満洲事情案内所）、『ロマノフカ村』（藤山一雄、満洲移住協会）、一九四二年の『北満のロシア人部落』（福田新生、多摩書房）、『白系露人の営農と生活』（暉峻義等、大阪屋号書店）なども、そうした調査報告の一端と見なしているだろう。一方、満洲の文化界においても、一九三〇年代の末ごろ

から、バイコフの「虎」をはじめ、白系ロシア人の文学作品が徐々に紹介され、白系ロシア人の生活像も次第に日本人の関心を惹き起こした。このような状況のもと、北村謙次郎も白系ロシア人問題を「春聯」に取り入れることになったのである。とりわけ当時の北村は、ロシア的雰囲気濃厚に漂う寛城子に住み、日頃触れあう白系ロシア人たちは作者の満洲生活の一部分ともなっていたので、彼らに対する関心も並々ではなかったと思われる。ここではまず、史実としての「蘇炳文事件」から検討していくことにする。

### 1 「蘇炳文事件」

「蘇炳文事件」は「春聯」の背景として扱われた歴史的事件である。この事件について、北村謙次郎は、「建国後間もないころ惹起された蘇炳文事件といふ、や、史実的な固い事件を中心に掲ふ手筈になってゐるけれども必ずしも表面から描かず軟らかな手法の中にだけばんやりした雰囲気が出るかを楽しみながら書いていきたいといふのが実は僕の下心なのである」と述べている。<sup>29)</sup> 北村の言う「軟らかな手法」で、どれほど「ばんやりした雰囲気」が描けたかどうかを検証するためには、この事件の内容を読み直しておく必要がある。

「蘇炳文事件」は一九三二年九月二十七日から十二月三日にか

けてホロンバイルで発生した抗日戦争である。日本側では「ホロンバイル事件」と呼んでいるが、中国側では「海満（海拉爾・満洲里）抗戦」と記録されている。

事件のリーダー蘇炳文は一八九二年、遼寧省の生まれ。保定軍官学校の第一期生である。一九一七年に第一次世界大戦に参加したが、軍閥混戦の内戦に反対して、軍から身を引いた。しかし、一九二五年、郭松齢の誘いで奉天派に与することになり、張学良の部下となった。「満洲事変」後、ホロンバイル地域の最高軍政長官に就いた。一九三一年十一月、黒龍江省省長馬占山が江橋抗戦を呼びかけたが、多勢に無勢のため敗戦し、関東軍に投降した。その結果、黒龍江省に隸属するホロンバイルも日本軍の管轄下に置かれることになった。だが、蘇炳文は関東軍に協力する姿勢を示すことなく、抗日の軍事力を蓄積しつつあったため、関東軍のホロンバイル進出の障碍となった。

ホロンバイルは満洲の北西の大草原地帯で、ソ連とモンゴル人民共和国に隣接するため、その中心地であるハイラルは、軍事的に重要視されていた。関東軍は一刻も早くこの地域を確保しようとした。彼らは、まず、金銭や利権などで蘇炳文を誘惑したが、失敗したため、国境警察隊の入境を要請した。当時、蘇の抗日準備はまだ整っていなかったため、彼は関東軍の要求をやむをえず認めたが、抗戦の準備は一層急いで進められた。一九三二年九月、

国際連盟が中国東北問題をめぐってジュネーブで総会を開催した。それに応じて、中国東北の侵略された実情、および関東軍の非人道的行為を全世界に暴露するため、蘇をリーダーとする抗日活動がついに引き起こされた。

一九三二年九月二十三日、蘇炳文はハイラルで軍事会議を開き、「東北民衆救国軍」を結成した。九月二十七日、東北民衆救国軍は国境警察隊を含めハイラル在住の日本人二五三人を監禁した。十月一日、蘇炳文はハイラルで開催した万人軍民大会において、東北民衆救国軍の成立を宣言、命をかけて国土を守ることを誓い、ここに、日本軍に対する抗戦がいよいよ開始されることとなった。この戦争は前後六十日間近く続いた。中国軍には一万一〇〇〇人が参加し、日本側は二万人<sup>26)</sup>が出動した。十二月三日、日本側の強大な軍事力に抵抗できず、蘇の軍隊はソ連領内に撤退した。

この事件について、当時、『満洲日報』は一九三二年九月二十九日より事件の報道を開始したが、その全体像を報告するものとしては、翌年十二月に公刊された陸軍省調査班の『呼倫貝爾事件に就て 附呼倫貝爾の概観』がある。日本陸軍は、事件の原因を、「本件は蘇炳文及張殿九が、人事問題及満洲里関稅收入の政府移管等に関し、省政府に対し不満を有するに端を發し、俸給不渡に依る部下の不平を名とし、愛国的反滿反日を標榜して、事起こせしものであるが、其真意は日本人監禁によりて軍費其他

を強要せんとしたる軍閥的古思想、私欲思想の現れである」と結論した。現在、中国では、この事件は中国の抗日戦争の一部として記録されているが、日本側では満洲国建国初期の反乱として、比較的簡単に扱われているにすぎない。<sup>29)</sup>

北村の小説「春聯」においても、この事件に、それほど重きを置いていない。作者は、事件の要因や意義などについて、具体的に触れようとしなかった。事件はいわば、この物語の背景として描かれているにすぎない。たとえば、日中軍の数回の衝突についての詳しい描写は「春聯」にはどこにも出てこない。北村の筆致は、戦争の具体的な場面を避け、厳しい状況に陥った小野個人の描写だけに留まっている。そこそがまさに北村の言う「必ずしも表面から描かず軟らかな手法の中にどれだけほんやりした雰囲気が出るかを楽しみながら書いていきたい」ことであつたのだろう。満洲国の建国精神のありようを描いたこの小説において、北村は小野の建国ヒーローたる雄姿を真正面から描かず、彼の逃亡生活を通して、当時の日本人の、他民族との協和への認識を心理的に展開させることを選んだ。言い換えれば、「春聯」において北村が抱いた「建国精神」とは、建国運動に伴う苦労話の類ではなく、避難中の小野を通して見た、他民族への認識、および日本人と他民族との協和への思いであつたと理解される。<sup>30)</sup>

## 2 「満洲国」の白系ロシア人

蘇炳文事件の扱いにおいて、北村謙次郎が特に力を込めて描こうとしたのは、小野の逃亡体験を通して見出した「満洲国の未来の文明像」である。その文明像は、満洲国を信頼して小野を助けた白系ロシア人ピョートル夫妻を通して明らかにされていく。この「理想」的な白系ロシア人夫妻まで辿りつくまでには、まず、作者の同情を引き出した寛城子の落ちぶれた白系ロシア人たちの姿がある。

彼らの生活は惨めさ。だけど、それなりに、どこか落着いて暮らしてゐるな。おれたちみたいに日本といふやうな立派な故国を持たないといへばそれまでだが、少なくとも冬は暖かく、夏は涼しく暮らせるやうに念入りに家を建て、さ。大した金も持たないのに、何か生活を楽しんで毎日を送つてゐるらしいぢやないか

銀作のこの感想は、同じく母国を離れた立場にありながら、異郷に流亡する白系ロシア人の方が日本人より満洲の生活に慣れていて、楽しく生活できているという点についての、作者の「なぜなのか」という問いをひそかに伝えてくる。ここで、作者は、白系ロシア人の生活様態を参考としながら、在満日本人の生活スタ

イルを模索する意図を明らかにしている。

「春聯」において、この模索は振作の自問自答の形式で展開される。その「問い」は寛城子に住む白系ロシア人たちに対する関心から生まれたものであった。

新京のあちこちのオフィスで見るやうに、こゝでも床拭き、お茶酌み、ペチカ焚きなどに、それぞれ白系露人の男女を使用してゐた。ぼろ服をまとひ、意地の悪さうな顔をした婆さんの手からお茶を貰ふのもあまり愉快ではなかつたが、ぼろスカートの尻を逆さに、濡雑巾を両手に押して床を這つてまはる掃除女の姿を見るのは、惨めといふ以上に不愉快だつた。彼らに与へられる仕事は、結局こんなことしかないのかと、半ばあきらめた気持ちで見遣つてゐると、給料が不足とかで急に姿を消したり、仲間と語らひ、中途半端なストライキめいたことを始めたりした。金銭以外に頼むところ少いため、さういふ方面にかけては敏感で悪賢いといふやうな話しも聞いた。

このような白系ロシア人たちは、観察者振作にとつて、ただ「白系露人は何処へ行くかといふ、折に触れて頭に上る例の問題が、ぼんやりした跡を残して流れたに過ぎなかつた」。つまり、

ここで作者は振作の身を借りて、新京は白系ロシア人の居場所ではないとはつきり指摘したのだつたが、では、彼らが一体どこに行くのかという点については、「漠然」としたままであった。

その「答え」は、寛城子にやってきた「指導者」の小野との出会いによつて得ることができた。ハイラルで蘇炳文事件に遭遇した小野は白系ロシア人に助けられ、そこで彼らの生活を観察する機会を得た。それは、ピョートル・ブリホージコフ夫妻である。彼らは牧場を経営し、製粉工場や営業所も持っている農業経営者である。小説では、彼らは寺田警士の「われわれと極く親しい、いい男ですよ」という話のなかで初めて登場した。その「親しさ」はのちに小野たちの避難生活に現れた。小野たちの避難所を作るために、ピョートル夫妻は、牧場の使用人たちを解雇し、ナターシャとグレゴリーたち四人だけで牧場を支えながら、地下室を作つたり、情報を収集したりする、きわめて辛抱強い人たちである。彼らの生活は、小野の目には、「当地でも有数の牧場経営主であるが、家では、衣類、家具類、台所用品など日常使用する器具は、必要の最小限度に止まつている」と映っている。ここで、小説冒頭の日本人の引越し場面を思い返すと、鮮明な対照となる。つまり、作者は「物の少なさから来る生活の単純性は、ひいて生活に活力を与へ、創造性を付与する。その単純さが彼らの宗教と結びつき、更に大地と結びついて、てこでも動かないやうな

安定感を人に与へるのであらう」という結論に至り、「満洲へ来たら満洲の気候風土に適した生活を送るのが合理的だらうに、日本人はどういふものか先住民族たちの優れた遺産を継承しようとしなさい」と日本人の生活習慣・日本文化への執着を批判する。さらに、ピョートル夫妻の持つ人間性が、北方の自然のなかでの原始性と単純性にあると賛美して、満洲に定住するには、白系ロシア人の持つ、満洲の気候風土に適した「簡素」な文明に学ぶべきであり、それが満洲国の将来の文化になるべきだと考えた。

このような認識を踏まえ、蘇炳文事件後、小野は北満の白系ロシア人の移住問題などに取り組むことになるわけだが、指導者としての立場から彼が「民族互助」を提唱したことは、すなわち、作者北村謙次郎の、満洲国における「民族協和」思想への同調を意味すると見てよいだろう。ただし、満洲に住んでいたロシア人は主として、ソビエト政府に不満を抱く白系ロシアの貴族や軍人、東清鉄道に関わる技師・駅員などであるが、彼らは大体ハルビンなどの大都市、または鉄道駅附近に住んでいた。ピョートルのような農業経営者はかなり少なかったはずだから、彼らを取り上げて、白系ロシア人の生活を一概に決めつけ、「在満白系ロシア人の幸福の生き方は北満で農業に従事すべく」と論断したのはいささか短絡的であるし、作品創造を支える実地調査の不十分さも窺われる。

### 3 ナターシャの登場

少女ナターシャは、「春聯」の物語が成立するためには、不可欠な存在である。親を知らない「正体不明」の人物として描かれる彼女は、ユダヤ人ユンケルマン邸の「下女」よりも惨めな扱いを受けていたが、ユンケルマンの死後、邸を出て、「全裸に近い姿で」ハイラル河畔をさまよったところを小野が発見され、ピョートル邸に預けられた。その後、ピョートル邸の下僕グレゴリーと結婚して子供を産んだが、小野とともに新京に移った後、そこで都市生活に適応できず、夫の没後、再びハイラルのピョートル牧場に帰ることになるのである。

この少女は、小説の構造上、二つの機能を担っている。一つは、白系ロシア人を作品舞台に引き出す装置としての役割である。彼女の家出をきっかけに、小野はピョートルと面識ができ、それが、その後の避難生活の伏線として働く。また、ハイラル河の河畔を彷徨していた小野たちは、夢遊症の彼女の歌によってピョートル邸に導かれ、安全な逃亡生活を過ごせるようになった。いわば、彼女の存在によって、小野は白系ロシア人の生活を観察することができ、先述の「答え」に行き着くことが可能になったのである。その他、この少女の「夢」(「もつと別なところ、暖かいところ、明るいところ行きたい」)は小野の助力によって実現したが、グレゴリーの病死は、白系ロシア人には「大地に足をつけた生活を営ま

せた方が幸福なのではないか」という結論を小野にもたすことにもなる。この一連のプロット設定は、読者に多少不自然な印象を与えるかもしれないが、一人の白系ロシア人女性を取り上げ、白系ロシア人は「都市生活に不適応だ」ということを立証しようとした作者の意図は明らかであろう。

その二は、ナターシャが作家北村謙次郎のロマンチズム（美意識）の所在となっている点である。この種の「女性キャラクター」について、北村はかつて「自分の美貌を知らないでゐるやうな少し馬鹿げた少女」<sup>31</sup>を書きたいと述べたことがあるが、その根本的な理由は、「由来文学の強さといふものは、ますらをぶりの勇敢さといふものに、反つてこの世の垢を感じ、むしろ女子供の、更にへり下がつては河原者の弱さの中に見出される奇妙な存在なのだ」<sup>32</sup>というところにあつた。しかし、「春聯」におけるこのロシア少女の性格設定は、北村の創作過程にあつて、相当時間をかけて獲得されたものである。

一九三一年、北村謙次郎が文壇にデビューした頃の作品「胭脂（ニコティン）」<sup>33</sup>に登場する少女は、名前もなく、幼いときに両親と死別して宣教師の養女となつた、可憐ではあるが、「白痴に近い女」である。小説の最後に、この現実世界から消失してしまふような存在で、いくらか漠然としたイメージを与える。それが、一九三八年、北村が満洲に渡つた頃に創作した「鶴」<sup>34</sup>になると、

主人公はすでに名前を持つていて、自我も主張する、一人の社会的存在として描かれているが、その結末は、彼女が「鶴に化して飛んで」いくといつた、ファンタスティックな変身譚で終わる。「胭脂（ニコティン）」の神秘性から脱却できず、いつそう伝説ふうな幻想物語となつてしまふ。しかし、一九四一年の「春聯」に登場するナターシャは、以前の作品のヒロイン同様、両親を知らず、「少し馬鹿げたふうのタイプの少女」ではあるが、ピョートル夫妻の親切に助けられ、当初の幼児のようなしゃべり方から、物事を明白に表現できるまでに成長し、やがては結婚して子供まで生む。以前の二つの短篇における、異次元に消失する少女たちとは違つて、ナターシャは、この現実社会に確かな根を下ろして生きていくのである。さらに、彼女は、ハイラル河への執着と「明るいところ」への憧れも現実のものとして、その存在自体「大陸的な色」に包まれることになつた。このように、これら一連の創作を通して、北村謙次郎の「女性キャラクター」は、最初の幻想的な存在から、次第に現実的な存在へと具象化していき、最後には、満洲という土地に生活する異国の女性として実体化した。

夜更けては人影もなく、河音も何か孤独を嘆くやうに物悲しげに聞える曠野を、たつた一人の娘が恐れげもなく唄をうた

つて歩くといへば、それだけでも人の心を怯えさせるのに充分であらうに、まだ顔を見た者もないといふ不思議な言説さへつけ加へられて、これを一種の妖精のごときものとし、恐れ崇めようとするのは無理もないわけであつた。

ハイラル河畔を歌いながらさまようナターシャのイメージは、彼女の無意識の信仰心が自然の大地と結ばれ、その大陸的な抒情（ロマンチズム）は、まさに北村謙次郎の提唱した「満洲ロマン」<sup>35</sup>という創作理念の具現化であつたと見てよい。この点から言うと、「春聯」は在満日本文学作品のなかでも、作者固有のロマン主義を満洲風土に移植した成功例の一つと言えるのではあるまいか。その意味では、北村の「春聯」は日本文学の中国大陸進出の代表作と見なすこともできよう。

### 三 在満日本人の生活像

#### 1 寛城子の風景

寛城子は、この小説の第一、二章と最後の第九章の物語が展開する舞台であり、作家北村謙次郎の文学世界を読解するにあつて、きわめて重要な空間であると見なされる。

寛城子は今の長春の北部にあり、清の時代には長春庁の所在地

であつた。小説発表時点での「寛城子」は、もとは二道溝と称する村落であつたが、東清鉄道（中東鉄道）の敷設にあつて駅として選ばれた土地であつた。東清鉄道は一八九六年、露清密約によつて敷設され、一九〇三年に全線が開通、その周辺約四〇〇〇平方キロメートルの管轄権および治外法権がロシアの手中に歸した。寛城子には東清鉄道の南滿支線の一駅が置かれ、鉄道建設に伴い、一帯にはロシア風の市街が形成されていた。鉄道建設の関係者と治安維持の軍隊をはじめ、多くのロシア人が寛城子に住みつき、その人口は一時、当地の中国人に迫り、彼らはこの地域の主導者となつていた。学校、教会、商店、郵便局、喫茶店などが営まれ、寛城子の隅々までロシア的雰囲気には満ちた町となつたが、鉄道開通の翌年に勃発した日露戦争の結果、ロシアは長春以南の鉄道を失い、新たに開業した滿鉄の長春駅に貨物を奪われ、寛城子駅は次第に衰頹していき、駅周辺の町並みも寂れていった。その後、ロシア革命の勃発、ソビエト連邦の成立、滿洲国建国など一連の事件が続くなか、東清鉄道はロシアにとつて経済的にも軍事的にも重要性を失い、一九三五年三月には滿洲国に売却されることとなつた。滿洲に住むロシア人たちもソ連に戻つたり、ヨーロッパないしは中国の関内に移住したりして、残されたのは、旧ロシア帝国に未練を残す旧貴族とそれを支持する旧軍人など、いわゆるエミグランチたちであつた。そして、彼らの多くは安定し

た職業を持たないまま、貧しい暮らしを余儀なくされていた。一方、日本勢力の満洲侵入に伴い、日本人の満洲移住は著しくなった。一九三七年、満洲国「第一次五カ年計画」が実施され、首都新京も日ごと変わりつつあったが、急激に増加した日本人にとって「住宅難」が大きな問題となった。そのため、寒村となった寛城子が再び注目されることになり、一時の腰掛け場として多くの日本人が居住するようになった。とりわけ、一九三七年に満洲映画協会が設立されてから、その臨時の撮影施設が廃駅後の倉庫やホームに作られたので、映画関係者など、仕事で寛城子に出入りする人も増えてきて、寛城子も多少にぎやかさを取り戻した。

寛城子は、作家北村謙次郎の約十年にわたる満洲国在住時、もともと馴染み深い場所であった。いわば、北村文学にとつての「満洲風土」の発源地である。そこには、横田文子、緑川貢、長谷川濬など文学仲間が多く住んでおり、川端康成など来満日本人作家が訪ねてくることもあり、北村の勤務する満映撮影所の所在地でもあった。寛城子はしばしば、彼をはじめ、日本人作家たちの文学作品の素材となった。たとえば、一九三八年に満洲に渡ってきた作家横田文子は渡満早々、寛城子を舞台に小説「美しき日」<sup>36)</sup>を書いたし、長谷川濬も「寛城子」<sup>37)</sup>という表題の作品を発表している。彼らはそれぞれの角度で寛城子の側面を取り上げたが、北村謙次郎ほど、寛城子への愛着と、その地を背景とする世の流

転とを巧みに表現したものはいない。たとえば、「春聯」には、鼠を井戸端で処分する時の振作の心情を描写した一節がある。「五分もた、ぬうちに、鼠どもは死ぬだらう。そう思ったとき、振作に不思議な感情が動いた。彼はもう何年も、十年も二十年も、この長屋に住んでゐるやうな気がした。捕鼠器の中の鼠も、豆腐屋の言葉も、井戸端も、何もかも親しいものに思はれる」。無造作な描写ながら、ここには、土地と人間との一体感を通して、満洲という環境に溶け込んでいる作者の心情が巧みに表出されている。では、このような寛城子において、日本人はどのように生活していたのか。

## 2 小説中の「寛城子」——日本人の視線に立つ満洲像

幾日か気づかずに見過ごしてゐた白楊の梢がいつか黄に染め変へられたと思ふ間もなく、けふはすでに冷たい北西の風に誘はれて、絶え間なくあとからあとからと枯葉を散らすやうになつた。

小説の冒頭、北村は、満洲特有の「白楊」が北西の風のなか、枯葉を散らす様子を取り上げている。日本の風土とまったく異なる季節の移り変わりに、作中人物のしっとりとした寂しい心象を

重ねあわせている。根気よく落葉を集めている中国人小孩、ベンチで談笑している白系ロシア人の子供……他民族との共存のなかで、日本人の隣人の引越しは主人公振作の深い郷愁と異国生活の寂しさを引き出し、その感傷が寛城子の天地を包み込んでいく。

その天地は、冴えわたる大気のなかに響くロシア寺院の鐘の音、朝の目覚めをもたらす石炭を掻く音、千切れた黒い煙などに満ちていて、日本人、ロシア人、中国人たちのそれぞれの営みで賑わっている。寒気に耐えながら出勤する振作は、オフィスで、日本人の上役同士の軋轢を聞かされたり、会社の車で競馬に行く課長の話の聞いたりする。白系ロシア人は、ぼろ服をまとって床拭き、お茶酌み、ペチカ焚きなどに従事している。中国人も、野菜売りとか豆腐屋、新聞配りのような社会の底辺に生きる人たちばかりである。それらが振作の見る寛城子であり、満洲生活のすべてであるが、作者の思索は、そこに留まってははいない。たとえば、中国人同士の喧嘩の場面。路上でぶつかり、争う新聞配達人と野菜売りのやり取りを観察しながら、作者は小野を通して、中国人の心理（「面子」）を巧みに捉えてみせる。また、捕鼠器のなかで互いに噛みつく二匹の鼠を見て、「ターデ、シンホワイラ」（「彼らの心が腐っていた」——筆者訳）の一言を残した老爺についての挿話も、人間社会を映すと同時に満洲の風土をよく伝えている。

寛城子の中国人の落ち着いた生き方に共感を持ちながら、反面、

作者は白系ロシア人に対する疎遠感をいくらか意識しているところもある。天使のような白系ロシア人の子供が楽しそうに遊んでいる一方、職場には金銭至上主義のみすばらしいロシア人の大人がいる。両者のギャップはあまりにも大きく、作者は、「それならばあの薔薇色の頬した少年少女も、汚い中国人小孩に混つて落葉掻きをしなければならぬのかと考へると、振作にもさすがにはつきりした返事は得られなかつた」と書いている。

そのような寛城子の社会相の描写にこそ「春聯」の独自性があると、当時、吉野治夫によつて評価されることがあった。「従来、訪満作家が視察の結果発表した『満洲の小説』は多くは開拓地を取り扱つたもので、そこに満洲の現地色を見ようとしてゐるが、実は満洲にとつて「開拓地」はむしろ特殊であつて一般ではない。……満洲を描いた作品は、むしろ現地の作家より先に日本内地作家によつて数篇作られたが、如上の憾があつたことは否めない。これに対して北村氏の『春聯』は、特殊の事件を取扱ひながら、やはり、どこことなく満洲らしい色と香をにじませてゐる。文字どほり、どこことなくといふ全体感で特に具体的に指適することは、困難だが、現実によく満洲に居住したものの生活感が自ら情感的に浮かんでくるのは争はれない」。

中国人と白系ロシア人に対して、北村はこのように観察する一方、在満日本人に対しては、明らかに批判の視線を投げかけてい

る。一例を挙げると、作者は、銀作兄弟の日常生活の一場面とし

て、戸沢家の引越しの情景を取り上げた。「机があり、筆筒があり、蒲団包み、漬物桶、その他、雑多な家具類や勝手道具の類が順序よく積み込まれて、それは何処の家の引越し風景とも変はりないものであった」。日常生活の細々としたもので、きちんと用意された荷物である。七十年後の今日の日本人の引越し風景とも変わりがなさそうであるが、作中の白系ロシア人ピョートル夫妻だったら、それほどの荷物を作ろうとしてもなかなか揃えられなかっただろう。対応する場面を直接並べていないので、多少理解しにくいのが、ここには作家の丹念な指摘が潜んでいる。つまり、日本人は（ロシア人に比べ）自国の文化に執着しすぎ、満洲の風土に馴染むことができないまま、結局、日本に戻ることになる、と述べているのである。類似的指摘は、作中、所々現れている。たとえば、子供の遊びについて、中国人の子供とロシア人の子供は、よく外で遊ぶが、日本人の子供は庭での「おままごと」に決まっている。さらに冬に入ると、薄着のため室内でしか行動しなくなる。日常に接しているはずの満洲での生活の智慧は、日本文化の「高いレベル」によって、頑なに拒絶されているといふのが、作者の思いである。相当鋭い批判なのだが、北村謙次郎の筆になると、それが一種の感傷のなかに流れてしまうので、読者には、こうした日本文化批判がつい見逃されてしまうものではあ

るまいか。

### 3 「満洲国」との距離——銀作について

北村謙次郎の「春聯」を論じるにあたって、一つ避けて通ることのできない部分がある。それは、作者の心理的な葛藤が託されている銀作のありようについてである。「春聯」における銀作の設定は、この小説において大きく問題視される場所であらう。川端康成の「この作品は色調が破れ矛盾が含まれてゐる」<sup>39</sup>という言葉、岸山三平の「失敗作」<sup>40</sup>と決めつけた断定的な批判、また、吉野治夫の「満洲らしい色と香」<sup>41</sup>といった評価、これらはすべて、この人物像に関わっている。その理由は、銀作が作者自身の分身であるからである。M撮影所に勤め、寛城子でのんびり暮らしている兄の人物設定には、作者自身が重ねられている。北村謙次郎も、寛城子の粗末な構えの住宅に何年も住み、近くにスタジオを持つ満映に勤めていたことがある。その不便で貧弱な住環境のもと、文筆にいそしむ北村の暮らしぶりには、川端康成も感心したようである。彼のその物静かな観察と深い考えなど、作中の銀作とまったく同じではないかと思われる。それゆえ、この小説で設定された銀作像は、作者の葛藤を感じさせる存在となる。

重ねての引用になるが、小説の冒頭、白系ロシア人について触れた箇所で、「彼らの生活は決して豊かなどと言へたわけのもの

でないばかりか、むしろ惨めな、うらぶれた生活と言つてい、苦  
のものである。それならばあの薔薇色の頬した少年少女も、汚い  
中国人小孩に混つて落葉掻きをしなければならぬのかと考へる  
と、振作にもさすがにはつきりした返事は得られなかつた」と  
いつたような関心が示されるが、振作自身、それに納得できない  
まま、まず自分からその関心を打ち消そうとしている。「それど  
ころか、他民族に対して余計なおせつかいをやくものとしか思へ  
なかつた」。この心情はそこに留まることなく、さらに、「彼の心  
の中には漠然と、白系ロシア人は何処に行くかといふ、折に触れ  
て頭に上る例の問題が、ほんやりした跡を残して流れたに過ぎな  
かつた」という一種の混迷に陥り、現実社会に対する距離感を読  
者を感じさせる。この距離感は、弟の就職問題においても、また、  
自分が妻を満洲に迎えるかどうかといった問題においても、そこ  
かしこに感じられる。

しかし、小野の回想談をめぐつての、振作の態度は多少とも読  
者に意外感を与える。それは特に、小野の語つた「建国精神」を  
素直に受け取つて建国運動に挺身することになった弟貞造と兄と  
の対照に見られ、兄弟の対話のなかで展開されている。たとえば、  
同じ物語を聞いたのに、「建国精神」に共鳴する弟に対し、振作  
はナターシャの存在を重視し、それを「ロマンチック」な物語と  
してしか受け取ろうとしない。また、弟から「兄さんは、どうす

るの」と問われたときに、「当分はこの生活を続けるよりほかな  
いだろうなあ」と答える。そういう振作自身は、満洲国に対する  
「夢」から、いくぶん距離を置いているかのように読み取れる。  
にもかかわらず、振作は、満洲国の現実を批判したり、冷やかに  
見たりしているわけではない。では、「このままの生活」とは何  
かというと、寛城子に住む底辺の人々との接触、たとえば、白系  
ロシア人の希望のない将来を憂えたり、貧しいけれど活力に満ち  
た中国人商人の姿を観察したりするといった日々のことなのであ  
る。しかし、観察の後どうするかについては、作者は明言してい  
ない。一方に弟の「夢」があり、もう一方に、その「夢」から距  
離を置こうとする兄があるという設定なのである。この設定の意  
味を、北村自身、まだ明白に把握できていないようにも思われる。  
言い換えれば、作者は「建国小説」を書こうとしたが、完全に  
そこに没入することができなかったのである。作者の「文人」と  
しての自立心を保つため、「政治」に対しては、ある程度の距離  
をとっているようにも見える。作中に「民族協和」思想への共感  
といったものは多少読み取れるものの、各民族の諸相に対する理  
解に至っては、ただ一方的に白系ロシア人への関心を通して、在  
満日本人の生活スタイルを検討するといった程度に留まり、白系  
ロシア人そのものについても、その生活実態に迫ることはできず、  
そこに作品世界の限界があることは明らかである。北村の求めよ

うとする「建国運動」の實質とは、政治的実践というより、満洲に対する「観察」に留まるものだったのではあるまいか。振作に与えられた役割とは、在満日本人への批判と同時に、傍観者としての作者の迷いの姿であったともいえそうだ。

おわりに

従来の北村謙次郎に対する一般の評価は、主として、彼と『日本浪漫派』や『満洲浪漫』との関わりに着目する程度に留まっていた。本稿は、そこから一步を踏み出し、長篇「春聯」の分析によって、北村文学における「満洲ロマン」の実体を検討してみた。

この小説において、北村は、自身のロマンチズム体験と、満洲の大陸風土への認識とを結合して、自ら提唱した「大きなロマン」という文学理念の形象化を図ったのだ。しかし、その両者が十分調和していないため、作品全体には、「色調が破れる」というイメージを読者にもたらす結果となった。とはいえ、作中に漂う「満洲の香り」は傑出し、その点においては、在満日本人の文学史のなかで一つの位置を確かにしている。一方、建国運動のヒーロー像の創造において、作者自身、積極的に満洲国イデオロギーと一体化できていないことから、逆に、そこに北村の思想の本音の部分を垣間見ることできる。また、白系ロシア人のよ

うに満洲の風土に合わせて合理的に生活すべきだとする北村の主張は、日本文化に執着する在満日本人に対する批判ともなっている。それは、満洲国をよりよくしていくための、彼の「観察」に基づく一つの結論だったともいえよう。北村謙次郎は、ある距離を置いて満洲国に向かいつつ、文学者としての批評の眼をもって創作に取り込んでいたと言っているのだろうか。こうした問題は、今後の北村謙次郎研究における重要な課題となってくるに違いない。

注

- (1) 北村謙次郎『北辺慕情記』（大学書房、一九六〇年九月一日）。
- (2) 川端康成「序」『春聯』（一九四二年三月十二日）二頁。
- (3) 吉野治夫「北村謙次郎『春聯』について」（『満洲評論』第二十二卷第十七号、一九四五年五月二日）。
- (4) 孟昶（もうちょう）、九一九〜九六五年、十国後蜀の最後の皇帝。
- (5) 「夕刊新小説 春聯」（『満洲日日新聞』一九四一年一月十日朝刊）。本論における引用に際しては、旧字体を新字体に改め、明らかな誤植を訂正した。
- (6) 「虎」（日・バイコフ作・絵、長谷川濬訳）は、一九四〇年六月二十五日から十月三日まで全八十五回にわたって『満洲日日新聞』夕刊第一面に連載。
- (7) 「成吉思汗」（榎本捨三作、今井一郎絵）は、一九四〇年十月五日から一九四一年一月十九日まで全八十五回にわたって『満洲日日新聞』夕刊

第一面に連載。

- (8) 満洲国の官設美術展。一九三七年から一九四五年まで全八回にわたって催された。第二回国展は一九三八年新京で開催。展覧会の出品区分は第一部に東洋画、第二部に西洋画、第三部に彫刻、第四部に法書という構成だった。

(9) 注(5)に同じ。

(10) 注(5)に同じ。

- (11) 新聞に掲載されている「春聯」での美しいエミグラントの「唾娘」の名前は「ソフィア」ではなくて、「ナターシャ」である。ロシア人の名前として、両方ともよくあるが、「ソフィア」はギリシア語から来た言葉で「智慧」の意味を持つ一方、「ナターシャ」はラテン語から来たもので、「天然的、親しみやすい、詩情」などの意味を持っている。小説でのロシア少女のイメージは、後者に相当近い。

(12) 注(5)に同じ。

(13) 田中総一郎「満洲の新聞と通信」(満洲弘報協会、一九四〇年十月一日)。

- (14) 呉清源、一九一四年に中国福建に生まれ、囲碁の棋士。日本棋院名誉客員棋士、「昭和の棋聖」とも称される。

(15) 李聖傑「川端康成における戦争体験について——「敗戦のころ」を手がかりに」『ソシオサイエンス』第十六号、二〇一〇年三月。

- (16) 「春聯」に先行して紹介されたものとしては、浅見淵編『廟会』(竹村書房、一九四〇年五月二十日)、『作文』同人九名の短篇集、日向伸夫「第八号転轍器」(砂子屋書房、一九四一年五月五日)などがある。

(17) 新聞小説の特徴としてよく使われる「時代と季節の借景」などといったものであるが、具体的には、小野俊太郎「日経小説で読む戦後日本」(ちくま新書、二〇〇一年四月十九日)の第一章を参照。

- (18) たとえば、単行本では初出の「細君」が「奥さん」に、「露西亞」が「ロシア」に書き直されたりするなど、読者に対する配慮も窺える。

(19) 注(5)に同じ。

- (20) 昭和戦争文学全集編集委員会編『戦火満洲に挙がる 昭和戦争文学全集 第一巻』(集英社、一九六四年十一月三十日)。

(21) 黒川創編『外地』の日本語文学選 第二巻 満洲・内蒙古／樺太(新宿書房、一九九六年二月二十九日)。

(22) 山田清三郎編『日満露在満作家短篇選集』(ゆまに書店、二〇〇一年九月二十五日。原本は春陽堂書店、一九四〇年十二月二十二日刊)。

(23) 坂本秀昭・伊賀上菜穂『旧「満洲」ロシア人村の人々』(東洋書店、二〇〇七年二月二十日)二頁。

(24) 注(5)に同じ。

(25) 厲春峭「呼倫貝爾抗戰史話」(内蒙古文化出版社、一九九〇年)八頁。

(26) 『満洲国史 総論』(満洲国史編纂刊行会、一九七〇年六月三十日)三〇四頁。

(27) 一九三二年九月二十九日の『満洲日日新聞』第二面には、「満洲里に反乱起り 在留邦人危し 海拉爾も危険」というタイトルで「北満に暴動」の事情が報道されている。その後、日本軍の軍事行動、満洲里で拉致された日本人についての安全保障声明、蘇炳文の「兵変に無関係」といった記事が続報された。ほかに、雑誌「協和」では、高橋源一「風雲暗き呼倫貝爾——三百邦人の運命はどうなる」(「協和」一九三二年十二月一日、一一頁)や長谷川兼太郎「満洲里を憶ふ」(「協和」一九三二年十二月一日、一一二頁)などといった記事が掲載され、ホロンバイルと満洲里の地理紹介と併せて事件を報道している。また、『満鉄社員健闘録』(満鉄社員会、一九三三年一月五日)には「逆徒蘇炳文の反乱」と題する記事が、『満鉄社員健闘録 第二篇』(満鉄社員会、一九三四年八月二十五日)には、芳賀千代太「蘇炳文討伐軍の大輸送」、松尾清次郎「雪の大興嶺を越えて」、小木良一「蘇炳文部隊の大進軍」など、事件関連の記事三篇が収められている。川島芳子「動乱の蔭に」(時代社、

- 一九四〇年二月二十六日)も、一章を割いて事件に触れている。川島は旧知の蘇との和平交渉を企図したが、これは実現に到らなかった。
- (28) 陸軍省調査班『呼倫貝爾事件に就て 附呼倫貝爾の概観』(一九三二年十二月)。
- (29) 注(26)に同じ、三二五頁。
- (30) ちなみに、庄司通惟の実録ふう読物「白系(海拉爾事件秘話)」(『月刊満洲』第八卷第十、十一号、一九三五年第十、十一月号)でも蘇炳文事件が扱われている。「春聯」のピョートル夫妻を思わせるロシア人が、二人の日本軍人を助けるという物語だが、ナターシャは登場しない。この作品は、のちに庄司鄭吉『何とかスキーの娘』(月刊満洲社、一九三九年十一月五日)に収録。作者の庄司通惟(鄭吉)には、本名の山名正二名義による著書『満洲義軍』(月刊満洲社東京出版部、一九四二年九月二十日)もある。
- (31) 北村謙次郎「三重吉のこと」(『日本浪漫派』第二卷第九号、一九三六年九月一日)。
- (32) 北村謙次郎「新春断想」(『月牙』吐風書房、一九四三年四月十三日)。
- (33) 「胭脂(ニコティン)」(『文芸プランニング』一九三二年七月号)。一個のパイプを小道具として語られる幻想的な短篇。ニコチン症の芸術青年と謎の女の奇妙な出会いと別れとを描く。
- (34) 「鶴」一九三八年、『満洲日日新聞』に連載。中篇小説。「鶴の卵」から生まれたという、一種不思議な伝説を背負った少女の成長物語。彼女は結婚の直前、鶴に変身して地上から消えてしまう。
- (35) 北村謙次郎は「探求と観照」(『満洲浪漫』第五輯、東都書籍新京出張所、一九四〇年五月二日)において、「浪漫精神といふ、文学的な意味あひではなく大陸日本人の生きかたの規範としてのロマンを説かうとするのである」と述べている。
- (36) 『満洲行政』第六卷第十号、一九三九年十月一日。
- (37) 『作文』第五十一輯、一九四一年九月二十日。
- (38) 注(3)に同じ。
- (39) 注(2)に同じ。
- (40) 岸山三平「三つの小説に就いて」(『満洲評論』第二十三卷第五号、一九四二年八月一日)二九〜三一頁。
- (41) 注(3)に同じ。